

カリキュラム研究からみた幼小接続と教師教育

浅野信彦（文教大学）

1. はじめに

私の専門は「カリキュラム研究」である。欧米の「カリキュラム社会学」や「潜在的カリキュラム」研究の成果に学びつつ、カリキュラムを「学びの経験の総体」と捉える立場からこれまで研究を進めてきた。院生時代には、高校における総合的な学習の時間のカリキュラム開発の事例を教師へのインタビューを重ねながら追跡していた。2004年に文教大学に着任して以降は、小学校における授業研究を通して、実践者と協働で子どもの学びを多面的に捉えることを模索してきた。カリキュラム研究からみると、学校内外の生活経験や教室での授業の経験を通して、個々の子どもが「学ぶ」、その道筋の中にこそ、カリキュラムの実体があると捉えられる。私が小学校の授業を参観する際には、子どもの発言やつぶやき、表情、振る舞いやしぐさなどに注目することになっている。こうした子どもの表現を通じてでなければ、個の学びの事実には迫ることはできない。カリキュラムの実体は子どもが主観的に経験する「学び」の連なりの中に隠れている。各学校のカリキュラム開発を推進する際にも、授業における子どもの些細な表現から学びの事実を深く捉える鑑識眼をもつ教師を育成することが不可欠であろう。これは教師教育の課題であり、幼小接続カリキュラムを開発する場合も同様である。私自身は、2020年度の文教大学教育学部の改組に伴い、幼小接続の視点を教員養成にどう位置づけ、どのような教員を育成すべきかという問題意識をもっている。こうした観点から若干の話題提供を試みたい。

2. 「学びの経験の総体」としてのカリキュラム

「カリキュラム」は日常的に用いられる教育用語であるが、その意味するところは曖昧である。一般には、国が定める「学習指導要領」や、各学校が編成する「教育課程」などが挙げられよう。しかし、カリキュラムの語源であるラテン語の *currere* が「走路」や「履歴」を含意していたことを想起すると、国や学校の教育意図が書き込まれた指導要領や教育課程に対し、それらの制約を受けつつも、一定のズレを伴って展開する学習者の経験の側にこそカリキュラムの本質があることが理解される。そこには学習者自身の生活経験や教育実践の文脈が介在するため、同じ教育課程の下であっても多様なカリキュラムが生成しているはずである。この前提に立つと、学習指導要領や教育課程のみに焦点を当て、具体の実践や子どもの学びに切り込まない「カリキュラム」研究はありえない。そこで、カリキュラム研究者の多くは、一つの教育実践の過程を細かく分析したり、実践者と協働でカリキュラムや授業の改善をめざすアクション・リサーチを試みたりしてきた。近年では、学校の自律的経営を推進する観点から「カリキュラム・マネジメント」も提唱されるようになった。現行学習指導要領においては、教育行政の文脈では従来どおり「教育課程編成」が用いられている一方で、子どもの「学び」を通して資質・能力の育成をめざすという意味合いで「カリキュラム・マネジメント」がより強調されている。

3. 小学校におけるアクション・リサーチの経験から

私が小学校の授業研究に参加し始めた頃、当時の学習指導要領に対する「学力低下論」者からの批判が社会的に拡大していた。こうした風潮の中、教育実践の重点を「総合的な学習の時間」から国語や算数の「反復学習」にシフトさせる動きが現場に広がっていた。しかし私は、あえて「総合」に力を入れ続けている学校の授業研究の門を叩いた。いくつかの学校を継続的に訪問し「総合」の授業観察を重ねた。特に高学年では、探究課題を自分事と捉えて深く追究しようとする姿、困難な問題に直面したときに本音で話し合う真剣な姿に圧倒されることがし

ばしばあった。一方で、そのような「総合」の授業は、教師の優れた指導技術によって成立しているわけではないことにも気づいた。というのも、教師にインタビューをしてみると、彼ら自身も子どもたちの探究力や課題に向き合う真剣さを目の当たりにしたときの驚きを隠さなかったからである。こうした子どもたちは、低学年から「体験を通して様々なことに気づく」「今後どうするのかを話し合っで決める」「自分たちのアイデアを実践する」「実践したことを振り返る」「自分の思いを作文に書く」というプロセスを繰り返して経験していた。こうした経験を重ねる中で「学ぶこと」に対するポジティブな「構え」のようなものが育っており、それが高学年の探究の姿に表れているのではないかと考えた。その後、様々な教科の授業研究に参加するようになったとき、子どもの多様な表現に注目し、それらを手がかりに個の内面に育ちつつある「学びの構え」を捉えようとするのが私自身の視点になった。一般の学校ではいまだに授業の形式や手法の善し悪しを批評する研究スタイルが主流を占めている。こうした現実を変えるにはどうすればよいのかを自問しつつ、これまでアクション・リサーチを続けてきた。

4. 教師教育における「幼小接続」の意義と課題

2020年4月、文教大学教育学部に「初等連携教育専修」が新設された。本専修では「幼小接続」を「遊びから学びへの発達上のつながりを捉える視点」と意味づけ、この視点から幼児教育から小学校教育につながる「学びの連続性」を見通して、子どもの体験や興味・関心を大切にできる授業を実践できる教員を育成することをめざしている。これを具現化するため、免許必修科目以外に専修基幹科目として「初等連携カリキュラム論」をおき、この科目の中心テーマとして幼小接続カリキュラムを扱うことにした。担当者である私としては、小1プロブレムの解決策という狭い視野から幼小接続カリキュラムを論じたり、幼小接続期の特別な指導計画を作成する必要性を過度に強調するようなアプローチは避けたいと考えた。むしろ、幼・小の段差をこえて連続する学びを個々の子どもの姿を通して常に捉え直そうとする鑑識眼をもつ教員を養成したいと願い、試行錯誤を重ねてきたところである。

一つの試みを紹介する。まずは一人の子どもの幼稚園年長3学期から小学校入学1週間後までの様子を連続して撮影した映像記録を学生に視聴させた。次に、映像中の特定の場面を学生ごとに指定して「ラーニング・ストーリー」を記述させた。さらに、これを用いて2回の「ビデオカンファレンス」を実施した。1回目は同場面のストーリーを記述した学生からなるグループで実施した。彼らは、同じ場面の子どもの姿を描写したにもかかわらず、人によって捉え方や記述の仕方が異なることに驚いていた。2回目は、記述した場面が重複しないようにグループを再編した。各自のストーリーを時系列に沿って紹介し合い、それについて意見交換を交えながら映像を再視聴するよう促した。こうした活動を通して幼小接続期の一人の子どもの学びや育ちを多面的かつ長期的に捉え直すことを体験した学生たちは、幼稚園や小学校などでも子どもの姿を複数の教師の目で見て記述し、様々な捉え方を相互交流し、より深く捉え直すことが重要だと実感したようであった。ある時点での子どもの姿から教師は多様な成長の可能性を想像し、その後の変容を見守りながら自らの働きかけを省察すべきであるという意見もあった。

<参考文献>

- ・マーガレット・カー著、大宮勇雄・鈴木佐喜子他訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房、2013年／『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか』ひとなる書房、2020年。
- ・佐伯胖・刑部育子・荻宿俊文『ビデオによるリフレクション入門－実践の多義的創発性を拓く－』東京大学出版会、2018年。